

学習者の防災意識を喚起する単元「防災デジタル小説」の提案 —自分を主人公とする物語創作を通じた自助意識と共助意識の醸成—

高木 公裕

1. 問題の所在

本稿は、小学校国語科における防災単元の一環として提案する単元「防災デジタル小説」の実際を示し、自分を主人公とする物語創作を通じた、自助意識と共助意識の醸成について考察を加えたものである。

2024年1月1日。石川県能登半島にある鳳珠郡穴水町の北東42kmを震央とする能登半島地震が発生した。地震の規模は気象庁マグニチュード7.6、震源の深さは推定16kmであり、この地震は石川県能登地方で観測した地震としては、記録が残る1885年(明治18年)以降で最大規模のものとなった。日本における震災史において忘れることはできない出来事であり、この出来事に合わせて、全国各地で防災教育の必要性が改めて問われることとなった。

この防災教育と国語科教育の結節点として、拙稿(2022)¹において、大木ら(2018)²などが提唱する「防災小説」を小学校国語科で導入することの価値について述べた。「防災小説」とは、大木ら(2018)によれば、「近未来のある時点で南海トラフ巨大地震が発生したというシナリオで、生徒ひとりひとりが自分が主人公の物語を800字程度で執筆したものである。発災後のどの時点を経ってもいいが、物語は必ず希望をもって終えなければならない。」小説のことである。拙稿(2022)では、この「防災小説」のナラティブの現実制約作用³に着目し、国語科教育における物語創作の展開の一つの可能性として、「防災小説」の意義について述べてきたが、今だからこそ、言葉を司る国語科教育の視点から、学習者の防災意識を涵養することができないだろうかと思者は考える。

東日本大震災をきっかけに、その重要性が再認識されるようになり、学校教育や地域の防災活動の中で、発達段階に応じて防災教育を行うことが全国的に広がっていった。現在は学習指導要綱をもとに理科・社会・保健・体育などの教科教育の中で行われているのが現状である。しかしながら、防災教育に取り組む学校は増えているものの、有用な教材や指導案が少なく、授業で取り扱う際には指導に関わる教職員の知識不足が問題になることがあるとの指摘もある。

したがって、本稿では、国語科教育の視点から、学習者の防災意識を涵養することを目的とした、単元「防災デジタル小説」の実際を示し、自分を主人公とする物語創作を通じた、自助意識と共助意識の醸成について考察を通し、国語科教育における防災教育の可能性について論じていくこととする。

2. 単元「防災小説を書く」(2022)の成果と課題

拙稿(2022)によれば、単元「防災小説を書く」の成果と課題について、以下のように整理をしてい

¹ 高木公裕(2022) 『自分事の世界創作という言語活動の教育的価値の検討：単元「防災小説を書く」にある物語創作の可能性を探る』佐賀大語教育巻6

² 例えば、大木聖子・永松冬青・所里紗子・山本真帆(2018)『「防災小説」の理論的考察—高知県土佐清水市立清水中学校における防災教育—』日本地球惑星科学連合2018年大会

³ 「防災小説」は、小説の中では過去の事象であっても、実際には未来に相当する地震発生までの期間をどのように過ごすべきなのかを、自ら綴った言葉によって制約しているとし、この作用をナラティブの現実制約作用と呼ぶ。

る。

「防災小説」のように、自分自身を主人公とした制約のあるナラティブな語り口の物語や地域社会の防災意識を高めるといった目的のある物語創作には、小学校国語科の学びだけに綴じることが無い教育的な価値があることについて述べてきた。それはまさに、物語創作を糸口とした社会参画であり、学習者自身が責任をもって学ぶ、エージェンシーを育む契機となっているとも言えるだろう。この価値こそが、「防災小説」に魅了され、休み時間にも熱心に学ぶ児童の姿と重なったのかもしれない。

一方で、課題も残る。本稿で紹介した「防災小説」の言語活動についても、カリキュラム・マネジメントの視点から単元構想をしていたとは言い難い。学びに浸る児童の姿から「防災小説」という言語活動に秘められた教育的価値を探るとするのが本稿の出発点であった。国語科のみならず、社会科や総合的な学習の時間も踏まえ、有機的に児童を伸ばしていくような年間指導計画の作成も視野に入れ、組織的に資質・能力を育む必要があるだろう。

先行実践より、国語科のみならず他教科等の学びと有機的に関連付けながら、防災についてのカリキュラム・マネジメントを行うことの重要性について言及している。先行実践においては、第4学年の実践であったことと国語科教育の物語創作の視点を色濃く出していたことから、学習者が住む地域の土地の様子や断層の有無、氾濫可能性のある河川の有無、あるいは、津波被害の可能性があるかどうかなど、学習者が実際に置かれている地域の実情について深く知る時間を取ることができず、地震発生を想定した実際の動きと異なる面も多々見られた。学習者が、地震を想定して物語を構成していくことについては、教育的価値が含まれていると考える一方で、実際に学習者の自助や共助の意識が高まったのかについて検証することはできなかった。

また、先行実践では、実際に作成した「防災小説」を文集に取りまとめ、地域の公民館に置くことができたのだが、地域への防災意識の啓発という面では、この作文という言語活動が相応しいのか再考の余地がある。先行実践が行われた2022年は、新型コロナウイルスの爆発的な流行に伴い、各自治体でGIGAスクール構想にあるような、一人一台タブレットの整備が急速に進んだのだが、単元の実施時期にちょうど配備されており、十分な活用ができなかった。そもそも、地域社会へ防災意識の啓発を意図してはじまったのが、高知県土佐清水中学校の「防災小説」の実践であり、そのために作成されたのが「デイズ・アフター」⁴であった。したがって、タブレットPCを活用し、作文という形態にとらわれない「防災小説」の在り方にも再考の余地があると考えられる。

3. 単元「防災デジタル小説」について

拙稿(2022)の課題を踏まえ、本稿では、単元「防災デジタル小説」を構想する。「防災デジタル小説」とは、プレゼンテーションアプリ「Canva」を活用し、作成した小説を複数のスライドに分け、小説にふさわしいBGMを加えながら自動的に提示するものである。また、掲示板アプリ「padlet」を連動させることで、「防災デジタル小説」の共有が容易になり、スマートフォン一つで多くの方々の作品の共

⁴ 制作/土佐清水市市立清水中学校・慶應義塾大学大木聖子研究室 挿絵・装丁/溝口真幸 協力/NHK 厚生文化事業団・土佐清水市 平成30年3月による。

有が可能になる。このような言語活動を設定し、以下のような単元の計画で学習を進めていく。

(1) 単元の概要

単元名 防災デジタル小説 「人を引きつける表現」「思い出を言葉に」(光村図書6年)

実施日 令和6年1月

対象 M小学校6年生 35名

単元の目標

- ・ 比喻や反復などの表現の工夫に気づき、「防災デジタル小説」の描写を工夫している。
(知識・技能)
- ・ 作品全体の構成や展開が明確になっているかなど、作品に対する感想や意見を伝え合い、作品のよいところを見つけることができる。
(思考・判断・表現)
- ・ 防災にかかわる資料をもとに、学習の見通しをもち、粘り強く、「防災デジタル小説」を書いている。
(主体的に学習に取り組む態度)

単元に位置付けた言語活動のモデル

本実践のモデルとして、土佐清水中学校が編纂した「デイズ・アフター」の作品を基に、「防災デジタル小説」に編集し直した。以下は、「防災デジタル小説」の基にした生徒の作品(資料1)と「防災デジタル小説」の実際の図(資料2)である。

資料1 「デイズ・アフター」の作品

下川口

朝から今にも雨が降りそうな天気だ。バスに乗り、いつもの景色を見ながらゆっくり出発する。洗濯物を手にし、干そうか迷っているようなおばあさんがいる。そして7時39分、バスは3個目である下川口浦のバス停へ止まる。

7時40分、バスのドアが開こうとしたその瞬間、運転手さんの携帯が「地震です」と鳴り、間もなく揺れ始めた。激しい。私は頭が真っ白になった。混乱したが、運転手さんの指示により、揺れが収まると順番に外へ出る。ここから一番近い避難場所といえば春日神社だ。そこまで走れば約3分。若い私たちには十分だ。しかし、周囲の建物やブロック塀が崩れ、とても通りにくい。しかも、たくさんのお年寄りがいる。私たちは声をかけながら走った。

神社の階段まで着くと、上るのに困っているお年寄りや障がい者のところへ私たちが一人ずつ付き、手を貸しながら一緒に長い階段の頂上までたどり着いた。

無事にたどりついた人ばかりではなく、こけで滑りやすくなっている階段やがれきでのけが人もいた。しばらくして、海から津波が押し寄せてくるのが見えた。みんな助かって良かった。

そして、一時間くらいたっただろうか。雨がぼつぼつ降り始めた。建物は狭く、全員入ることはできないし、備蓄されていた食料も少ない。泣く人や怒る人などで場は混雑していた。とにかく助かって良かったが、私はずっと家族のことが気になっていた。母と父はもう仕事場に行ったのか、まだ家にいたのかもわからないし、兄二人は、離れた高校や大学にいる。みんなばらばらだ。

悩んでいたとき、ふと、「災害伝言ダイヤル」を思い出した。以前少しだけ家族みんなで話し合ったことがある。もう忘れてしまっているかもしれない、という心配もあったが、伝言が入っていることを祈り、近くの人の電話を借り、震える手でボタンを押した。すると、なんとみんな無事だという伝言が入っていた。私は泣いた。

また、あとから入ってきた情報により、この南海トラフ大地震は「死者0人」だということだった。

資料2 「防災デジタル小説」のモデル



(2)単元の計画

時	学習活動
0	<ul style="list-style-type: none"> ・SHR や道徳の時間等を活用して、能登半島地震について知る。 ・単元の学習の全体像を知る。
1	<ul style="list-style-type: none"> ・単元で取り組む言語活動と出会い、単元の学習への具体的な見通しをもつ。 ・防災に関わる資料を基に、地域の防災事情について調べる。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・防災に関わる資料を基に、地域の防災に関わる情報を集める。 ・比喩や倒置など表現について知る。
3	<ul style="list-style-type: none"> ・「防災デジタル小説」の設定を決め、構成を考える。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・「防災デジタル小説」を「Canva」にまとめていく。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・「防災デジタル小説」の内容に合う、背景画や音楽を選択する。 ・作品を読み返し、表現や誤字脱字などについてチェックをする。 ・出来上がった「防災デジタル小説」をどのように活用していくのかについて話し合う。
6	<ul style="list-style-type: none"> ・「Padlet」を通して、友達の作品を共有し、作品のよいところを見つける。 ・単元のふり返りをする。

(3)単元のあらまし

国語科の学習に入る前に、様々な教科等との関連を図ることとした。

3学期が始業した日。SHR で能登半島地震の話題を取り上げた。第6学年の学習者たちは、2011年の東日本大震災の年に生まれ、物心がつき始めた2016年に、熊本地震を経験し、小学校の卒業の年に、能登半島地震を目の当たりにした。元日を家族で過ごしている中で、地震速報を目にした学習者が多かったこともあり、石川県にとって未曾有の大災害について情報を共有することとした。その後、道徳

の時間に、関東大震災の取り上げ、「復興」をテーマにした学習に取り組むこととした。また、社会科の昭和から平成にかけての災害について、Canva と Padlet を使ってまとめながら、震災の歴史を整理した。さらに、家庭科では、自宅で使わなくなった古布を活用して、「防災ポーチづくり」に取り組むこととした。このように、様々な教科等との関連を図りながら、とりわけ、国語科では「防災デジタル小説」づくりに取り組むことを通して、防災への意識を高めていくことと伝え、単元の全体像がつかめるようにした。

1 時目は、先行実践である、北海道釧路市の実践⁵と静岡大学附属中学校の実践⁶の特集を視聴したり、モデルとなる作品を一読したりしながら、本単元の言語活動である「防災小説」のイメージを共有し、防災マップや防災情報を参照しながら、学習者が住む地域の土地の様子を調べたり、避難場所を知ったりして、「防災デジタル小説」の構想を膨らませていった。単元の1時目が始まる前に、本単元の全体像を説明していたこともあり、この単元は、特別支援が急に在籍している自閉症情緒学級の4名も交流学級での授業に参加をし、「防災デジタル小説」の学習をすることとなった。まず、先述したTV番組の特集を視聴し、本単元の学習の見通しを立てた。この動画視聴を踏まえ、事前の他教科の学習において、他の地域では地震が起きているが、自分たちが住む地域は自身が少ないと認識している者が半数近くいたため、改めて36名が揃ったところで、学習者の体感として「安全」であると感じているか問うたところ、やはり19名の学習者が「安全」であると答えた。そこで、地域の防災マップを共有し、県内を通っている断層の位置や学習者が居住している地区や住居がある場所が地震や洪水などどのような災害に対応しているかについて読み取る時間を取った。そこで、資料に目を通した学習者は、「震度7の地震が来る可能性がある。」「洪水した場合に、浸水の可能性がある。」「建物が崩壊する可能性もある。」と、決して自分の住んでいる地域が特別に「安全」であるとは言い切れないことに気付くことができた。

2 時目は、さらに具体的な資料を共有しながら、「防災デジタル小説」の構想について見通しをもった。1時目の後、7名の学習者が、家に帰って、地域の土地の様子や「防災小説」の取り組みについて話題にしており、1名が離れ離れになった場合の合流場所について過程で共有をしていた。2時目は、実際に防災マップや防災資料を調べながら、「防災デジタル小説」の構想を膨らませていった。ある学習者は、「今の地域で津波の可能性はあるのですか？」とつぶやき、防災マップには無かった津波の被害について調べたり、ある学習者は、黙々と自宅でできる防災対策について調べたりしながら、具体的に、大地震が発生した際のストーリーを考えていた。「家族といるよりも、一人でいたときのことを考えたい。」と、誰かに助けってもらったり、誰かに頼ったりすることよりも、自分自身の力でどのように行動していくのかを考えていきたいと力強く意気込んでいた学習者もいた。授業の終わりごろに、ある学習者から「液状化現象とは何ですか？」という質問を受けたので、次時に共有する約束をした。2時目では、5名の学習者が、執筆に取り掛かっていた。

3 時目は、今一度、モデルを参照しながら、物語創作における「比喩」の効果や「情景描写」の効果、あるいは、「オノマトペ」の効果に触れながら、読み手に情景を効果的に伝える方法について共有した。

⁵ HBC 北海道放送(2021) 「東日本大震災から10年～防災小説」を参照

⁶ SBS 静岡放送(2020) 「【防災最前線】どう生き残るのか？中学生が書いた「防災小説」」を参照

が高いキーワードとして、「地震」から共起した一連の語彙群がある。この語彙群の内実を見ると、「机」「下」「揺れる」というキーワードが共に強い共起関係にあることが分かる。「地震」というキーワードから共起した用例としては、「僕はアラームが鳴って机の下にかくれた後、1つ考えたことがある。」「自分はずぐさまりビングの机の下に隠れた。」「その後お母さんに言われて机の下に隠れ、余震に備えた。」など、地震が起きた時の初期対応にかかわる描写の多く、地震が発生した際の一次対応を学習者が取っていることが分かる。

また、「できる」から共起した一連の語彙群の関係性も高い。「できる」から共起した語彙群の内実を見ると「家族」「全員」「無事」というキーワードに強い共起関係があることが分かる。「できる」というキーワードから共起した用例としては、「家族全員の無事を確認することができて嬉しくなったと共に、ふと同じ住宅街に家がある同級生」「同級生と同級生の家族と会うことができて、ひとまず安心することができた。」「全員で、無事避難所に避難することができた。」など、学習者を取り巻く、家族や同級生などの無事を確認した描写が多く、学習者の身の安全を確保するばかりでなく、周囲の人の安全を確認したり、実際に手を差し伸べたりする行動を取っていることが分かる。

6. 学習者のエスノグラフィー調査

本項では、学習者Aと学習者Bの単元での学習の様子を記述していくこととする。以下の資料5は、学習者Aが書いた「防災デジタル小説」の原稿である。

資料5 学習者Aの「防災デジタル小説」

セミの鳴き声が部屋中に鳴り響く。僕はいつも通りに7時に起きて、テレビを見ながらご飯食べて学校に行く準備をしていた。

その時だった。テレビとスマホから大きな音で、「地震です。地震です。」と部屋中に鳴り響いた。僕はあまりの揺れの大きさに倒れてしまった。その瞬間、南海トラフ地震という言葉が頭の中によぎった。その後お母さんに言われて机の下に隠れ、余震に備えた。しばらくしてテレビをつけると、「津波が来る恐れがあります。逃げてください。」とアナウンサーが叫んでいるような大きな声で訴えていた。僕とお母さんは、避難に必要なものをリュックと防災ポーチに入れて外に出ると、この世とは思えない光景を見た。ブロック塀が崩れ落ちたり、道路が膨れ上がったりして、車や人が通れなくなっていた。液状化現象も起きていた。ありえない光景を見て近くに住んでいたお婆さんのことが心配になり見に行った。でも、お婆さんは居なかった。どこに行ったかと心配したが、隣の家の人「隣の人は避難所に向かったよ。」と言われ一安心した。避難所に向かむ途中、お婆あさんが避難所に行こうか迷っていた。僕は「津波が来ますよ。一緒に行きましょう」と声をかけてお婆あさんの荷物を持ち避難所へ向かった。途中途中、避難所に行くか迷っていた人たちがいたが、僕は声をかけて、全員助けて死亡者を0人にするために、力を振り絞った。ようやく避難所に着いた。そこには、大勢の人がいて怒っている人や悲しんでいる人がいてみんなが感情を出していた。学校に行った妹と、会社に行ったお父さんのことが心配になった。でも連絡を取る手段がなくどうすることもできず一夜が明けた。朝には津波はひいていた。その後家に戻って中を確認した。泥水が入りこんだり物が散乱したりしていた。二階に置いていたスマホを取りお父さんに電話を掛けた。2分経って電話を切ろうとしたその時だったお父さんが電話に出て、「大丈夫だよ。」と返事が返ってきた。

その瞬間、ぼくはほっとした。学校は、地震の影響で臨時休校になり、家で死亡者0人を祈るだけだった。それから、捜索活動が始まった。ボランティアの人たちが避難場所に来て炊き出しやがれきを除去する作業をしていた。

そして一か月後、テレビを見ているとアナウンサーが「うれしいニュースです。Y町の地震による死亡者0人でした。」と報道されて、一安心した。僕達は、学校に行って地震による吉野ヶ里町の死亡者0人について話して「よかったね。」などの言葉がみんなの中に飛びかった。

一部、拙者が改編

学習者Aは、単元の学習に入る前から、能登半島地震のニュースについて関心を寄せており、阪神淡路大震災を題材にした道徳の学習の振り返りでは、「こんな大きな地震が来ると思って、日常を過ごしたいです。こんな気持ちで防災小説を書きたいです。ぼくは、このような震災遺族の人たちの気持ち、大きな地震のことを未来につなげて、全員が助かるようにしたいです。」と記述していた。

単元が始まると、地域の防災資料に目を向け、近くに断層が通っていることや震度7以上の地震が想定されることを知ると、「地域がこんな状況だということを知らなかった。」と口にしていた。このことを知った学習者Aは、自宅で両親に地域の防災事情について話し、有事の際の集合場所として、通っている小学校に集まることを約束してきたと話していた。さらに、学習が進む中で、「液状化現象」というキーワードに出会い、地域も液状化現象によって道路が寸断され、ライフラインが失われる可能性が高いことを調べていた。その後、学習者Aは、授業中はもちろん、自宅でも執筆を進めながら資料5にある防災小説を完成させていった。

資料6 学習者Bの「防災デジタル小説」

この日はクリスマスローズの花が咲いていた。

カーテンを開けた。空は曇っていた。外を見ても、いつもと変わらぬ風景。

弟と二人で留守をしていて、『今日のはのんびり過ごそう』と思い、テレビを見ていた。

そこから、三十分ほどがたっただろうか。

いきなり、テレビから耳がはち切れそうなくらい大きな警報が鳴っていた。すると、視界が急に左右に揺れだしたのだ。最初は、頭が追いつかなくて、パニックになっていた。しかし、ようやく理解ができた。地震だ。

とりあえず、弟と急いで机の下に隠れた。どんどん物が落ち、壊れていく。あまりの強さに立ってられない。怖さのせいで、そこから一步も動くこともできなくなった。

しかし、数秒で揺れが収まった。私も弟も、幸い怪我を負うことはなかった。しかし、家は段々と崩れていく。私は、弟を連れ、学校の体育館へと向かった。行く途中に家族や友達が無事なのか、凄く心配になった。

周りにも避難している人がいた。すると、『一緒に逃げよう。』とおじさんが言ってくれた。小さい頃にお世話になっていたおじさんだ。私は、おじさんと一緒に避難することにした。学校について私の目に最初に入ってきたのは、体育館にいる人の数。まるで、満員の電車のような感じだ。こんなに広い体育館でも、埋め尽くされるほどだ。どれだけの人が被害にあったのか、一目でわかった。そこには、家族や友達もいて、皆が元気そうにしていた。

『よかった、よかった、よかった』無事、皆と再会ができた。ニュースでも見た通り、軽症者は多数だが、死者は一人もでなかったようだ。皆、地震の対策を知っていたのだろう。本当によかった。

私は『助かった』。と思っていた。しかし、ここからも気を抜くことはできなかった。

避難して数週間が過ぎた。ここには、沢山の人が避難しているから、当然食料が足りなかった。毎日量が少ないせいで、お腹を空かせて苦しむ人が沢山いた。こんな食料不足が特に酷かった。そして、一人一人の部屋があるわけでもないのに、プライバシーにもいろいろ問題があった。このプライバシーに関して、怒鳴る人がおり、もめることもあった。

さらに困ったことが、地震によつての『停電』。照明がつかないため、夜が怖かった。皆も同じことを思っていただろう。停電することで、水道管が壊れてしまい、『断水』もあった。断水は、人が生きる中で最も大切な水を飲めなくなってしまう。食料も水不足している。そして、『場所取り』にも問題があった。この体育館は、大勢が避難しているのに、本当に狭い。中には押しつぶされている人もいた。もちろん、赤ん坊、小さい子供やお年寄りもいる。状況を知らない、子供が騒ぐ。夜になると、赤ん坊が泣きわめく。それに皆がビックリし、起きてしまう。そんな赤ん坊に怒鳴る大人もいた。だから夜は眠れない。そして、私が一番キツかったのは、ゲームができないことだった。私は、当たり前のようにゲームをしていたので、できないことが本当に辛かった。

いつまでこの生活を耐えなければいけないのかと、終わりが見えないほどだった。

やっと、何週間かその生活を耐え、家へ帰れる日が来た。家へ帰ると、何十年も帰ってきてない感じがして、あの生活を思い出す。今までの当たり前が、当たり前ではないことに気づいた。そして、地震の恐ろしさも理解できた。これからは、当たり前だった日々感謝し、地震への対策もしっかりしたうえで地震と向き合っていきたい。

一部、拙者が改編

資料6は、学習者Bが執筆した「防災デジタル小説」である。学習者Bは、学習者Aとは異なり、能登半島地震のニュースについて関心を寄せていたとは決して言えなかった。しかしながら、関東大震災や阪神淡路大震災を題材にした道徳の学習や地域の防災事情を題材とした家庭科の学習から、地震が自分から遠いものではなく、身近に起こりえる現象であることに気づいていった。

単元が始まり、地域の防災事情について知ると、高知県土佐清水中学校が作成した「デイズ・アフター」を何度も読み返しながらか、「防災小説」を執筆する価値を感じていた。住んでいる地域の近くを断層が走っていることや大きな地震で家屋の倒壊の可能性があること、また、時期によっては、河川の氾濫などの可能性もあることなどについても調べ、ノートに整理をしていた。防災小説の原稿を書く段階になると、避難所へ逃げていくだけではなく、避難所での生活を終え、自宅に帰るまでの小説を書く構想を広げていった。実際に、避難所生活の苦勞について、タブレットPCなどで調べ、住民同士のトラブルなども加味しながら防災小説に持ち込んでいった。

学習者Aも学習者Bも、道中で顔見知りでない「おばさん」と「おじさん」を登場させている。防災小説の構成をするにあたり、自分だけが非難するのではなく、近隣地域に住む住民が避難する描写、そして、その住民と関わり合う姿が描かれていることが分かる。自分と自分の家族ばかりでな

く、地域の住民にも目が向けられていることが分かる。この「防災デジタル小説」の執筆活動を通して、いわゆる「自助」の意識を醸成するとともに、「共助」の意識が芽生え始めていることが見て取れる。学習者Bは、「防災デジタル小説」の最後に、「やっと、何週間かその生活を耐え、家へ帰れる日が来た。家へ帰ると、何十年も帰ってきてない感じがして、あの生活を思い出す。今までの当たり前が、当たり前ではないことに気づいた。そして、地震の恐ろしさも理解できた。これからは、当たり前だった日々に感謝し、地震への対策もしっかりしたうえで地震と向き合っていきたい。」と締めくくっており、執筆活動を通して、有事の際にどのように行動を取ればよいのか、現状の生活を続けていて大丈夫なのかと自分の生活を見つめ直すきっかけとなったと語っている。

7. 成果と課題

「防災デジタル小説」の語彙分析と学習者のエスノグラフィー調査より、執筆活動を通す中で、現実には起きていないことを、起きたと想定して物語を創作することで、被災した場合にどのような現実が待ち受けているのかリアルな文脈で想像することができるとともに、希望を持って物語を終えるという物語のクライマックスに向けて、自分はもちろんのこと、家族や地域の方にも目を向けながら、共助の意識が育まれつつあることが明らかとなった。

また、防災小説という形式ではなく、「防災デジタル小説」という Canva と Padlet を活用した、視覚にも聴覚にも訴える小説に仕上げたことで、学習者同士の共有だけでなく、地域に向けた発信の一助ともなっていた。このようにインターネットを介し、防災小説を共有できる仕組みを整えることで、学習者の防災意識の啓発だけでなく、地域の防災意識を涵養することにも役立つ学習となるであろう。

課題としては、防災教育の系統性と発展性が挙げられる。防災の領域については、社会科の第三学年か第四学年で取り扱うことが多いが、この単元に入る前に、避難所がどこに位置しているのか、地域の土地の様子はどのようになっているのかなど、地域に目を向けた学習の積み重ねに課題が見られた点も多くあった。地域の防災意識を高めるためにも、今住んでいる場所がどのような状況にあるのか、どのような防災組織があるのか、あるいは、地域の防災訓練にはどのようなものがあるのかを知る機会を設ける必要があるだろう。そうすることで、学習者を取り巻く言語生活がより豊かになるとともに、共助の意識が醸成されるような防災単元となるであろう。

(吉野ヶ里町立三田川小学校 高木 公裕/たかき こうゆう)

8. 主な引用・参考文献・参考 HP

- ・達富洋二(2023) 「ここからはじまる国語教室」 ひつじ書房
- ・首藤久義(2023) 「国語を楽しくープロジェクト・翻作・同時異学習のすすめ」 東洋館出版社
- ・高木公裕(2022) 『自分事の世界創作という言語活動の教育的価値の検討：単元「防災小説を書く」にある世界創作の可能性を探る』佐賀大言語教育巻 6
- ・大木聖子・永松冬青・所里紗子・山本真帆(2018)『「防災小説」の理論的考察 一高知県土佐清水市立清水中学校における防災教育一』日本地球惑星科学連合 2018 年大会
- ・高知県土佐清水市危機管理課 HP
<https://www.city.tosashimizu.kochi.jp/kurashi/section/kikikanri/>
- ・白井俊(2020) 「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来:エージェンシー、資質・能力とカリキュラム」 ミネルヴァ書房